

陶徳民先生のご退職に際して

沈 国 威

陶徳民先生は二〇二二年三月末日をもって関西大学を退職されます。いつか来る定めではありますが、名残惜しい限りです。

「有縁千里来相會」。陶先生と関西大学とのご縁は早くも一九八四年一二月に結ばれました。当時中国の名門復旦大学で幕末の日英関係に関する修論を執筆中の陶先生は、その一年前に姉妹校となった関西大学の「大学院交流研究生」として上海から千里山キャンパスを訪れてきて、約五か月間滞在しました。アーネスト・サトウ『英国策論』や斎藤竹堂『鴉片始末』などの貴重資料を蒐集するためでした。受け入れ担当者は当時の文学部長、活発な日中学術交流活動で有名な大庭脩先生であった。松浦章先生と東洋史の博士後期課程学生鶴飼昌男さんも熱心に関係各所への案内役を務められました。一九八六年春に再び来日されましたが、今度は復旦大の若手教員として大阪大学大学院で学識を増やし、博士号を取るためでした。その目的は一九九一年三月に達成され、学位論文「懷徳堂の研究」は三年後の一九九四年に『懷徳堂朱子学の研究』という書名で大阪大学出版会の最初期出版物の一種として公刊されました。学位論文を提出後、審査結果を待っている間にアメリカに渡り、孫文と坂本竜馬の研究で有名なマリウス・ジャンセン先

生（外国籍の日本文化功労者第一号）の受け入れてプリンストン大学東アジア学部客員研究員として在外研究を始められました。博士号取得後は同先生の推薦によりハーバード大学E・O・ライシャワー日本研究所PDとなり、日米関係史の大家入江昭教授と徳川時代史の専門家H・ボライソウ教授の指導のもとで研究活動が続け、傍ら同大学東アジア言語文明学部杜維明教授のコア・コース「東洋哲学」の助教、タフツ大学歴史学部の非常勤講師（「韓国史」コース）をそれぞれ一学期担当しました。その後、マサチューセッツ州立ブリッジウォーター大学（米国型師範教育を導入し、『日清字音鑑』も作った明治期の教育者伊沢修二の留學先）で教職を得ましたが、一九九六年に河田悌一先生と大庭脩先生のご推挙により関西大学に迎えられました。以来、在職二六年間、関西大学の教育、研究に多大な貢献をなされました。

陶先生の学問分野は日本漢学です。中国の学問に依拠しながらも徐々に独自の問題意識と学問方法を樹立させ、近世以降大いに隆興した学問です。学位論文からも分かるように、陶先生は「懷徳堂」という大阪町人が開設した儒学書院（一七二四—一八六九）の組織形態、学問内容、関係人物へと研究を深化していったのです。関西大学に来られてからはさらに内藤湖南文庫に所蔵された貴重な文献資料を発掘し、吉田松陰、ペリー、ウィリアムズ（衛三畏）へと研究範囲を広められました。陶先生の強みは何と言っても英語圏の東アジア研究の現状を熟知されていることでしょう。関西大学はここ十数年来、「東アジア文化交渉学」という新たな学問体系を提唱し、文化交渉学教育研究拠点（文部科学省選定のグローバルCOEプログラム）を創設し、多くの大学専任教員を輩出しました。陶先生は、その広い視野、膨大な研究者ネットワークにより、まさにリーダーとしてふさわしい役割を果たされました。その後、東アジア文化交渉学会の設立（二〇〇九）に尽力され、初代会長として第一回国際学術大会を成功裏に導き、その国際的

な学会運営手法が当学会の発展に大いに寄与されました。また学会の英文雑誌の編集長の労も厭わず、現在も編集委員として指導を行っておられます。現在、会員数六〇〇人を誇る東アジア交渉学会は、これまで国際学術大会を一回開催し、英文学会誌を二三号世に送りだしました。陶先生は、東西学術研究所の研究課題である「東西両洋文化の比較研究」の中核をなすアジア文化の研究を大きく前進させた功労者です。

陶先生の人となりは、多言を贅する必要はないでしょう。「学而不厭」「誨人不倦」「諄諄善誘」「有長者風」、古君子を形容する言葉のどれもがふさわしいと思います。定年延長に入ってから、学殖として残すべく、十数冊の著書を出版する目標を立てられました。わたしも東西学術研究所所長として、その中の一冊、『松陰とベリー…下田密航をめぐる多言語的考察』に序文を執筆させて頂きました。序文で、以下のように記しました。

陶先生は、江戸、明治期の漢学者を中心に日本漢学に関わる研究に長年精進されており、日本、中国そして西洋を見渡せるマルチ研究者として広くその名を知られている。本書も、副題に「多言語的」とあるように、日本やアメリカの資料館、図書館に埋もれて人に知られぬ歴史文献を発掘し、東西の思想的葛藤に着眼し、精密に分析したものである。また、巻頭に置かれている60余の図版・画像からなる口絵も驚嘆に値する。「人間の言語と知識は、その内容に対象のイメージを含むものとして成立する」（上杉喬）とあるように、陶先生は、かねてから画像資料を蒐集し、歴史の記述に組み入れることに情熱を注がれている。画像の発見だけではなく、その掲載には著作権の処理に多大な時間と労力を強いられる昨今の状況を考えれば、陶先生の努力に敬服を禁じ得ない。努力の甲斐あって、本書において素晴らしい論考と相俟って、歴史の絵巻物を見せてくれている。

これはこの一冊に対する評価ではなく、むしろ陶先生の一貫した学風です。最終講義で、陶先生は、

海外洗礼 見賢思齊 松陰湖南 林肯栄一

文化交渉 無限転機 筆耕不輟 聊以自娛

と「古稀感言」を吟じられました。陶先生にとって、吉田松陰、内藤湖南、リンカーン、洪沢栄一等の先賢諸子は研究対象であり、人生の目標でもあることが読み取れました。また学問の方法、ご自分の治学態度も述懐しており、来場と同僚、学生諸君に深い感銘を与えました。

最近、陶先生からフランス語の辞書を購入し、若いときに習ったフランス語の記憶を呼び戻し、研究の深化を図りたいとお聞きしました。人生百年といわれる昨今、正に古希を迎えられた陶先生がおっしゃるように「人生はまだ旅の途中」とのことです。これからも健康に留意しながら、ますますのご活躍を祈りつつ、改めてこれまでのご功労を犒いたいと思います。

二〇二二年一月吉日



図1 関西大学東西学術研究所特別研究会・講演「中国教会大学史研究の現状」
 1997年12月17日 東西学術研究所蔵
 (敬称略) 前列右より奥村佳代子、尾崎実(1937-2003)、
 講演者 章開沅(1926-2021)；
 後列右二人目より松浦章、沈国威、内田慶市、河田悌一、一人おいて 通訳担当 陶徳民



図2 MIHO MUSEUM(滋賀県)見学時の記念写真 1999年3月22日 個人蔵
 (敬称略) 左より 吾妻重二、大庭博子夫人、Jansen 夫人、
 Marius Jansen(1922-2000；1999年度文化功労者)、河田悌一、
 大庭脩(1927-2002；1986年度日本学士院賞)、陶徳民



図3 関西大学文化交渉学教育研究拠点開所式参加者（一部）が内藤湖南晩年の
 隠居宅・恭仁山荘（京都府南部）を見学後、大広間で開催した晚宴
 （2007年秋） 個人蔵

（敬称略）正面中央 余英時先生（1930-2021）と夫人陳淑平；
 その左側 鄭培凱、王汎森、李焯然、章開沅、葛兆光；
 右側 陶徳民、河田悌一、戸川芳郎、増田周子



図4 北京外国語大学で開かれるS.W. ウィリアムズ誕生200周年記念
 国際シンポジウム参加者の記念写真（2012年12月14-18日）

北京外国語大学中国海外漢学研究センター蔵

（敬称略）前列右より2人目 陶徳民、3人目 王晓秋、5人目 山口栄鉄（1938-2021）、
 6人目 内田慶市；
 中列右より6人目 桐原健真、7人目 沈国威；
 3列目右より8人目 顧鈞



大正癸丑蘭学会百周年記念 発起人会 2013年4月12日(金) 於:関西大学千里山キャンパス

図5 関西大学で開かれた「大正癸丑蘭亭会百周年記念行事」の
発起人会記念写真(2013年春) 関西大学博物館蔵

(敬称略) 前列左より 祁小春、杭迫柏樹、興膳宏、前田裕、杉村邦彦、水田紀久、
脇田修(1931-2018)、河田悌一；
中列左より 中村伸夫、王宝平、木村昌人、大野修作、北川勝彦、陶徳民、西上実、
大橋成行(1944-2021)、陳波、岸田知子、中村史朗、仲本純介；
後列左より 井上克人、薮田貴、中谷伸生、吾妻重二、内田慶市



図6 天津・南開大学で開かれた国際シンポジウム「内藤湖南と中国」の
記念写真(2013年秋) 南開大学日本研究院蔵

(敬称略) 前列左より 宋志勇、大里浩秋、陶徳民、勝田尚、井上克人、楊棟樑、
J. A. Fogel、盧盛江、長谷部剛、西本昌弘；
中列左より 秦蓁、小田嶋隆一、朱琳、前田環、名和悦子、林志宏、劉雨珍、周閑、
錢婉約、何英鶯、吳偉明、劉岳兵；
後列左より 王凱、姜克寬、高木尚子、楊陽、高木智見、印曉峰、印藤和寛、胡寶華、
胡珍子、呂超、柳文全、馬銘

